第4室　調度　展示解説

N-88　鳳凰円文螺鈿唐櫃（ほうおうえんもんらでんからびつ）

唐櫃は大型の収納容器で、脚が付き、底が接地しない作りが特徴です。本品は、文様（もんよう）のかたちに切った厚い夜光貝（やこうがい）を木地に嵌（は）め込む螺鈿の技法によって、表面に鳳凰の文様が表されています。

鳳凰は左右の翼を広げて尾羽を丸めた円形の姿にデザインされています。その内側には細かな金粉が蒔（ま）かれ、それによってほんのりと鳳凰が浮き上がるような効果を生んでいます。大胆で大きな文様が放つ白く上品な光は、漆の艶（つや）やかな黒に映（は）え、平安時代に洗練された日本的な美意識をここに見ることができます。

N-90　瑞花蝶鳥金銀絵漆皮箱（ずいかちょうちょうきんぎんえしっぴばこ）

動物の皮革を型取（かたど）りし、漆を塗り重ねて作る、漆皮の技法で製作された箱の蓋の部分と考えられます。蓋表（ふたおもて）は、中央に大きく花文を表し、周囲に旋回するような４つの花葉文（かようもん）を配し、これと対置するように四隅に花葉文を置き、間地（まじ）には蝶を舞わせています。側面は中央に 2 羽の尾長鳥（おながどり）を配し、左右に草花文を表しています。文様（もんよう）はいずれも金銀泥（きんぎんでい）で描かれており、文様によって花と葉の配色を逆にするなど、2 色を巧みに用いて多彩な世界が表現されています。

N-91　漆皮箱（しっぴばこ）

動物の皮革を木製の型（かた）に押し当てて箱のかたちに成形し、麻布を張って漆を塗り重ねて仕上げる漆皮の技法で作られた被蓋造（かぶせぶたづくり）の箱です。蓋・身ともに縁には補強のための紐（ひも）をめぐらし、角（かど）は大きく削（そ）ぎ面を取っています。正倉院宝物に類似する品があり、奈良時代の製作と考えられます。漆皮は軽量で堅牢なため奈良時代に盛んに用いられましたが、変形しやすいため、平安時代以降は次第に衰退していきました。本品は文様（もんよう）等も見られない簡素な箱ですが、類例の限られる漆皮の遺例として大変貴重です。

N-116　火取水取玉（ひとりみずとりだま）
N-117　石名取玉（いしなとりだま）

鎌倉時代の『古今目録抄（ここんもくろくしょう）』（N-18）に、聖徳太子が５、６歳の時分に所持していたと記されるもので、当時は幼少の頃の愛玩品と伝えられていました。火取水取玉には網状の組紐（くみひも）が付属していることから装身具として使われたようです。また、屈輪彫漆合子（ぐりちょうしつごうす）に納められた石名取玉は双六（すごろく）などのゲームに使われたと考えられています。いずれも天保 13 年（1842）の『御宝物図絵追編（ごほうもつずえついへん）』に図があり、ことに火取水取玉のほうは、花形皿（はながたざら）（N-118）に載せられて描かれています。

N-118　花形皿（はながたさら）

低い高台（こうだい）をつけた、６弁の花形に刳（く）り込みをつけた小皿です。銅製、鋳造（ちゅうぞう）で、表面に鍍金（ときん）を施し、内底には透漆（すきうるし）を塗っています。高台は鑞（ろう）付けしています。

N-92　高燈台（たかとうだい）

台座・支柱・反射板の３部からなる燈台です。反射板中央の高さを調節できる鉄製の輪の上に、灯明皿（とうみょうざら）を載せて用います。反射板は光を反射させるために白く胡粉地（ごふんじ）に仕立て、3 人の稚児（ちご）を描いています。その姿は、巻物を広げて見るもの、筆を執（と）るもの、うつ伏して眠るものと三者三様に愛らしく表わされています。「眠り燈台」として知られていますが、この俗称は、うつ伏して居眠りする稚児の姿に由来しています。

N-86　千鳥蒔絵文台（ちどりまきえぶんだい）

文台は、書物や硯箱（すずりばこ）、短冊（たんざく）などを載せる小振りの机です。本品は、天板の両端に筆返しが付き、上面に州浜（すはま）に松、飛び交う千鳥などを金蒔絵（まきえ）で表しています。この種の図様（ずよう）は室町時代の作品に類例があり、甲斐（かい）国の歌枕（うたまくら）「塩山」（しおのやま）を表したと考えられます。蒔絵は、蒔絵粉の上に漆を塗った後、表面を炭で研（と）いで文様（もんよう）を現す研出（とぎだし）蒔絵を主体に、州浜や貝は蒔絵粉をまばらに蒔く絵梨子地（えなしじ）としており、技法にもこの時代の特色が現れています。足利義政（あしかがよしまさ）（1436～90）奉納と伝えられます。

N-78　硯（すずり）

N-79　硯（すずり）

硯は筆記等のために墨を擦（す）り、溜まった墨汁を筆につけるための道具です。いずれも陶製で、墨を擦る面には青海波（せいがいは）のような文様（もんよう）が見られますが、N-79 では使用痕が著（いちじる）しく、かなり摩滅が進んでいます。面が内側に向けて湾曲し、猿の顔に似ていることから猿面硯（えんめんけん）と呼ばれる形式で、通例は木枠などに嵌（は）めて用いられました。木製、漆塗の枠を伴う N-79 は、墨台（ぼくだい）(N-80)、水滴（すいてき）(N-81)、匙（さじ）(N-82) とともに聖徳太子が斑鳩宮（いかるがのみや）で使用したとの伝承を伴っています。

N96～N98　撥鏤針筒（ばちるのはりづつ）

象牙を轆轤挽（ろくろびき）により印籠蓋造（いんろうぶたづくり）に仕立てた円筒形の容器です。それぞれの筒の表面には、鳥獣や草花などの文様（もんよう）を撥鏤の技法で表しています。撥鏤は色染めした象牙の表面を刀で撥（は）ね彫りして文様を表す装飾法で、主に上代に行われました。天保 13 年(1842)の『御宝物図絵（ごほうもつずえ)』では、紅牙撥鏤尺（こうげばちるのしゃく）(N-83）とともに聖徳太子が仏像の袈裟（けさ）などを作る時に用いた針の容器と伝えられていますが、正確な用途は不明です。